

—編集後記—

134号をお届けします。本号では、一般投稿に加えて、畑地灌漑についての特集を組みました。なお、現編集委員会の担当も次号までとなります。

以前、農業気象分野のある研究者が本誌について『土壌の物理性』は、いい雑誌です。冊子は薄いですが、内容の濃い論文が一杯掲載されています。大切にしてください。」と仰っていました。冊子が薄い点はともかく、本誌がこういった評価・期待をいただけるのは、本誌に関わるものとして、非常に嬉しかったのを覚えています。これも、貴重な研究成果を本誌に投稿して下さる研究者の皆さん、購読者（学会員）の皆さん、歴代編集委員会・事務局の皆さんのご協力の賜物ですが、論文の質が守られている点については、とりわけ査読者の皆さんの多大なるご尽力のおかげであると確信しています。

現在の編集委員の一人として申しますと、査読を引き受けていただくのに苦心しています。皆さんお忙しいのは重々承知していますが、「この原稿は、是非この方に！」とお願いしても、必ずしも引き受けていただけないのが現状です。そうなると、細いコネクションを頼りに、どうしても偏った方々に集中的にお願いすることになってしまいます。誤解を恐れずに言うと、このままではドンドン投稿する研究者と査読ばかりでなかなか投稿できない研究者とに、クッキリ二極化してしまいそうで

心配です。原稿1報につき2名程度の査読者をお願いしますので、1報掲載されたら2報くらいの査読を引き受けていただけると、助かるなあと思います。

また本誌でも、多くの雑誌と同様に、年度初めに査読を担当していただいた方の氏名一覧を掲載して、謝意を表しています。科学の世界のお話ですから、ボランティア精神を基本とすることに異論はありませんが、査読を引き受けていただいた方に学会として、何かもう少し謝意を表する方法はないでしょうか？雑誌によっては謝金を出すこともあります。査読の労に見合うものではないようですし、諸々の煩わしい事務手続きを伴います。そこで例えば、本誌投稿料（ページ超過料や別刷り代等）の割引クーポンを査読者にお配りするか、10報査読していただいたら1度大会にご招待するか、20報査読していただいたら学会賞（功労賞）を授与するか、いかがでしょうか？

愚案の採否はともかく、人員削減等で査読をお願いできる研究者が減っている厳しい状況において、本誌の質を守りつつ関係者の負担の平準化と負担に見合う何らかの策を、学会として考える時期が来ている気がしてなりません。

望月秀俊（編集委員）

土壌物理学会

事務局構成	会 長	長 裕幸	(佐賀大学)	
	副 会 長	江口 定夫	(農研機構 農業環境変動研究センター)	
	庶務幹事	中野 恵子	(農研機構 九州沖縄農業研究センター)	
		宮本 英揮	(佐賀大学)	
	編集幹事	渡辺 晋生	(三重大学)	
	会計幹事	近藤 文義	(佐賀大学)	
	会計監査	中川 啓	(長崎大学)	
		徳本 家康	(佐賀大学)	
	編集委員会	委 員 長	取出 伸夫	(三重大学)
		委 員	小杉 賢一朗	(京都大学)
千葉 克己			(宮城大学)	
釣田 竜也		(森林総合研究所)		
中川 啓		(長崎大学)		
中辻 敏朗		((地独) 北海道立総合研究機構)		
橋本 洋平		(東京農工大学)		
諸泉 利嗣		(岡山大学)		
宮本 輝仁		(農研機構 農村工学研究部門)		
望月 秀俊		(農研機構 西日本農業研究センター)		
吉田 修一郎	(東京大学)			